
月の国のありす

あやぶ(´^`)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の国のありす

【Nコード】

N4039B

【作者名】

あやゞ(´∩´)

【あらすじ】

私は、本が好きなの。一人ぼっちだったけど、本に囲まれて育った。友達は…本だった。今日、全部の本を読み終えた。なのに…なのに、なんでこの本光ってんのー!？

私があります。

「おじいさんとおばあさんは、幸せに暮らしました。めでたしめでたし。」

この本も、

「こうして姫と王子は、永遠に仲良くしていました。」
この本も。

どうして物語というのは、ハッピーエンドで終わるのだろう。

私があります。佐久間あります。お金持ちの家のお嬢様。

ひとりっ子だった私は、物心ついた時から、友達は本だった。

長い年月をかけて、家にあるすべての本を読み終えた。

八月二十九日。そう、今日。

広い屋敷の広い部屋。私一人にはもつたない。

四人掛けのソファ、トリプルベット、大きな大きなクローゼット…。
どれも、私には大きすぎる。

すべての本を読み終えた私は、次に何をするか考えていた。

……おもしろいことがしたいな。

…といってもすぐには思いつかない。

暇だし、本でも読み返そうっと！

>ガチャ<

倉庫のドアを開ける音。もう、何回聞いたかな。…だが、目の前を見てはっとした。

何あれ、本が…

十段目あたりの、一冊の本が光っている。ありすの身長を少し越したくらいの高さ。はしごに登って、本を手にとってみる。

全部…読んだはずなのに…

表紙を見て、はっとする。

月の国の…アリス…。

表紙には、決して黄色とは言えない、写真のようなリアルな月が描かれていた。

まだ読んでないみたい。…おもしろそう。

ありすはその本を大事に抱え、部屋に向かう。
だが、部屋に帰ると、本の光は消えていた。

さっきの…夢？

とにかく、ありすは本を開く。一ページ目。

何これ……声に出して読んでください？

「私はアリス。ムーンタウンに住む月の精。
この本を開いたあなたにだけ、秘密の呪文を教えましょう。
声に出してと覚えてください。」

呪文…、あ、これだ。

「ムーン・フェアリー……うわっ！」

また本が光った。さっきより強い。これはまさしく、月の光じゃないだろうか。

二十秒位光っていた。

光が途切れた瞬間、妖精が出てきた。

手のひらにのるくらい小さな体で、一瞬目を疑ったが、ピンク色で半透明の羽に、

小さなティアラ、そして、絵本で見たことある露出の多いドレス…。これは妖精としか思えない。

「ありすさん。ありがとうございます。」

「…え？」

目を疑った。

…それどころか自分自身全体を疑った。

私の名前を言われた。

…体全体が、凍りつくように驚いた。

「わたしはアリス。ムーンタウンから来ました。」

「…」

ムーンタウン…月の町…。

「今、ムーンタウンはブラックフェアリーという悪い妖精が私たちの町を

滅ばせようとしているんです。

だから、ありすさん、あなたの力を貸してください。」

「…え、力…？」

「その、あなたが首にしているネックレス…」

アリスは、私の首の青と白で、

宝石みたいに光る石のネックレスを指さす。

「ああ、これね。川の近くで小さい頃拾ったの。

貧乏くさいけど、光っててきれいでしょ？」

私は、首にかけていたネックレスを倉庫の小さな電球の光に当ててみる。

「それ、月のカケラ。」

「そうそうそれよ。…ってえ、月！？」

「ムーンタウンの神が、地球にただ一人存在する選ばれし女神に月のカケラをさずけたそうです。そしてそれがあなた、ありすさん。まさかそれが私と同じ名前だったなんて…。」

「…私に、何をしろって言つなの？」

「来て頂きます。」

アリスは足早に去っていった。

……たどり着いたのは…屋敷の庭。
噴水の前にあるベンチに立っている。

「え？ちよつと待って何それ！」

「ムーン・フェアリー…」

また、あの強い光。不思議な感覚。

本が光って、それに吸い込まれるよう……。…。

「わあああつ！」

ここは…月？（前書き）

お金持ちのお嬢様ありすは、いつも通り本を読もうとする。光った
本から出てきたのは・・・妖精！？

「ここは…月？」

気が付いたらそこは、初めて見る天井。

クリーム色に、黄色い水玉が描いてある。

…何だか寒いような…

「うわっ！」

自分の服を見て飛びあがりそうになった。

妖精が着ていた服と、色違いのものを見に付けている。

「あ、お目覚めですか？」

「ちょっと…ここ…」

「私や仲間の暮らす場所です。人間界でいう…寮みたいなものです。」

寮…。

「おなかはお空きになりました？」

「…」

こくりと、小さくうなづく。

「私が作りました。良かったら食べてください。」

「わあ。おいしそうかも。」

目の前に並べられた料理。

…肉じゃがかな？

肉みたいだけど…白い。

「その白いの、ここで育てている草花の一つです。火を通すと、赤かった物が白に変わるんです。」

不思議でしょ？その名の通り、不思議草って言つんですよ。」

「へえ。そうなんだ…。」

おそろおそろ、口に運んでみる。
その味は、どこか懐かしいような。
甘くなく…けど苦くなくて、辛くもしょっぱくもない、やさしい味
がする。

「…おいしい。」

「そうですか？よかった。作ったかがありました。」

何だか、アリスといると、何だかほっとする。

安心できる。

「…あ、その本、アリス…」

私が指さしたのは、アリスの絵本。

そう、『不思議の国のアリス』。

「ああ、それですね。そちらの世界にもありました？」

「うん！おかあさんがね、あたしにはじめて読んでくれた本だから…。」

あ！…そういえばあたし、何してるんだろっ。おかあさんっ…！

「ねえアリス、ここ、どこ？月なの？」

月だったら、浮いてるはずだよね。

「ここは月に一番近い惑星。

だからムーンタウン。月の何兆分の一の面積しかありません。」

あ、月じゃないんだ。

「今この小さい星に…、ブラックフェアリーが…。」

よく理解できないけど、ブラックフェアリーっていうのはいいものじゃないみたい。

「私に…私に…、何をしろって言うの？」

ちょっと可愛い子ぶって、首を傾げてみる。

「じつちに来てください。」

アリスは満面の笑みでの寮のドアを開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4039b/>

月の国のありす

2010年10月8日22時36分発行